

「ライフ・シフト」の必要条件③3つの「ワーク」

企業経営漫談士 岡野実空

前2回のコラムで取り上げた S・スマイルズ著『自助論』と、実践的続編『向上心』(いずれも、知的生きかた文庫)。それらの訳者でもある東京大学名誉教授の竹内均先生は、後者のあとがきで「これほど現代の日本の読者にふさわしい本はない」とまで言い切っています。その核となっている「あ・た・ま」の「あ・に・き」の「惣領」に続き今回は、「ライフ・シフト」を実現するための「第3分」として、「ヘッドワーク」「フットワーク」「ネットワーク」という3つの「ワーク」を取り上げます。

その1: ヘッドワーク

「ヘッドワーク」とは、すなわち頭脳労働のこと。このコラムですでに取り上げた頭の「よ・つ・や」(良い・強い・柔らかい)は、「ライフ・シフト」にいずれも必要ですが、特に重要なのは「強さ」と「柔らかさ」。とりわけその後者は、それまでの経験とその後の人生をつなぐ要諦です。その代表ともいえる「教訓抽出能力」の重要性については、すでにJMA・畠山芳雄氏の遺訓で解説しました。

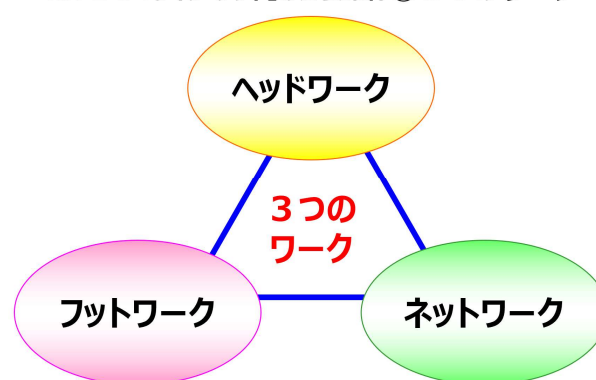
さて今回強調したいのは、一見関係なさそうなこと同士の「つながり」を見出す能力の重要性。それはキャリアとともに増える知識や経験を活用し、次の階段を上るために必須なものです。またその訓練の一つとしては、半世紀を超える人気 TV 番組「笑点」の「大喜利」がお薦め。単なる視聴者として楽しむだけでなく、回答者の一人になりきって自らも考え、その能力開発に役立てましょう。

その2: フットワーク

「フットワーク」とは、軽快な行動のこと。すぐに身体が動く若手のうちはともかく、ミドルになり、指示命令で周りに動いてもらうようになると、それは徐々に劣化を始めます。それを防ぐ方法は、楽をしたいという意識を抑え、自分でできることは自らこなすという習慣。もともと何から何まで自分でやる必要はなく、自らの「役割」に沿ったことは極力自分で行い、手助けが必要な部分のみ支援を仰ぐという心構えです。

かつて経営幹部育成を支援していた医薬品製造の F 社で、新社長 A 氏から就任後の方針演説の感想を求められ、「データ部分の説明が細かすぎ、肝心の方向性が見えづらい」と指摘し、経営企画スタッフへの伝言をお願いしたところ、「すぐ修正します」とのお応え。なんと氏は自分で原稿を考え、発表用の資料も自ら作成されていたのです。感心しきりの私に向かい、「自分ですべきことは、自分でやりますよ!」という言葉は、氏のその後の大活躍を予感させる力強い意志表示にもなっていました。

KM E-6 「ライフ・シフト」の必要条件③ 3つのワーク



その3: ネットワーク

自分で考え自分で動くのは、ある意味楽ですが、そこには自分と限界があります。ましてミドルの立場で、苦手な部分まで自分が関わっているのは、社内外の期待に十分応えることはできません。企業の組織は本来その分業のために存在しますが、ますます複雑化する「知識社会」に大半が上手く対応できず、その補完手段が必要になっています。

その切り札となるものは、「ネットワーク」。さまざまな「専門性」や「強み」を有する社内外の個人や集団が、共通の目的達成に向け相補効果や相乗効果を発揮します。その紐帯となるのは、お互いの「信頼」関係。それは先の「友愛」と密接に関係するものです。また「ライフ・シフト」先行組の「ネットワーク」は、仕事よりそれ以外の関係を通じて構築されたものが大半。「ライフ・シフト」は、「ワーク・ライフ・バランス」の産物ともいえます。因みに、お釈迦様が天上から垂らす運命の『蜘蛛の糸』はわずかに1本。それを多方面に広げ、人生100年時代を生きる「セーフティーネット」にするのも「ネットワーク」です。

最後に3つの「ワーク」の準備開始はいつから？

今でしょ！

平成30年12月17日 実空